確認の“啊”と“吧”

李　　貞愛

0. はじめに

「確認」という言語行為はわれわれの日常のコミュニケーションにおいて頻繁に行われ、その役割もかなり重要である。中国語において、この「確認」の機能をもつ語気助詞に“啊”[1]と“吧”があげられる。

1）你昨天没来啊?（昨日来なかったの？）

2）你昨天没来吧?（昨日来なかっただろう？）

数々の先行研究ではこの二つの意味と機能について以下の如く解釈されている。まず、例文1）の“啊”について、趙元任1968（398頁）は“用于求证式问话”（確認を求める問いかけ文に用いられる）と指摘し、朱徳熙1982（289頁）は「相手の意向や発言に対する確認に用いられる」と指摘している。そして、例文2）の“吧”については、話し手がある主張あるいは予想をもっているが確定できず、「聞き手の同意を求める」[2]あるいは「確認を求める」[3]という指摘がある。また、主語が第二人称の場合だけ確認の意味をもっているという邵敬敏1996（67頁）の指摘もあげられる。

このように従来の研究は、“啊”と“吧”がともに「確認」の意味と機能をもっており、“吧”はそれ以外に「同意を求める」ときにも用いられるという点では一致しているが、使用される場面の違いや基本的な性質についての考察はあまり見当たらない。本稿は、例文1）と2）のように「確認」の意味と機能をもっている“啊”と“吧”に注目して、諾否疑問文の文末につく両者を、使用場面レベルで記述することを目的とする。

1. 本稿の視点

1.1 言語の機能と文の類型

言語の機能は、相手に情報を伝達することである。そこで平叙文は聞き手に対して情報を提供するもの、疑問文は聞き手に対して情報を要求するもの、感嘆文は話し手自身の感情を表出するもの、命令文は聞き手に対して行為実行を要求するもの、と理解される。こうした観点から見ると、話し手・聞き手のどちらが情報を所持しているかは実際のコミュニケーションの場で極めて重要な条件となる。

1.2 疑問文と話し手・聞き手情報

疑問文は話し手が聞き手に対して情報を要求する文であるため、情報は当然聞き手が所持している。では、話し手はなぜ聞き手に情報を求めなければならないのか。以下の例文を見てみよう。

〈諾否疑問文の場合〉

3）他是中国人吗?（彼は中国人ですか。）

3）のような文は、話し手が“他是中国人”という肯定的命題に対して疑いをもっており、聞き手に判断を求めるものである。

〈正反疑問文の場合〉

4）他是不是中国人?（彼は中国人ですか。）

4）は話し手の中で「X」つまり“他是中国人”という肯定的命題と「不 X」つまり“他不是中国人”という否定的命題の並立があって、聞き手に判断してもらおうとする文である。

〈選択疑問文の場合〉

5）他是中国人，还是日本人?（彼は中国人ですか、それとも日本人ですか。）

5）は話し手の中に“他是中国人”と“他是日本人”という「X」と「Y」の二つの命題が存在しており、聞き手に選択してもらおうとする文である。

〈疑問詞疑問文の場合〉

6）他是哪国人?（彼はどこの国の人ですか。）

これは“他是〈中国、日本、美国、英国・・・・・・〉人”のように複数の要素が話し手の中で並存し、聞き手にどれか一つ選んで“哪国”というところを補充してもらおうとする文である。

つまり3）～6）は、いずれも話し手が確かな情報を欠いているため、情報を所持している（あるいは所持していると見込まれる）聞き手から情報を獲得しようとする文であると考えられる。木村・森山（1992）では、このような文を不確定情報文と呼んでいる。不確定というのは、相互排除的な複数の判断が並立する情報の保持状態を指している[4)]。こうした、不確定情報文を聞き手に提示するということは、聞き手が提供しうる情報を保持していると話し手が判断していることを意味する。

2. 不確定情報と確認要求の疑問文

2.1 確認とは何か

諾否疑問文について「確認」の働きをする“啊”と“吧”を考える前に、まず、確認についての定義が必要であると思われる。『新明解国語辞典』（1994第四版）は、「確認」という言葉について次のように解釈している――「確かにそうであることを認める」。そうすると、確かにそうであるかどうかは誰か（話し手自身の場合もあるが）に確かめてからわかることで、確かめるということはその前にまず「不確かなことが存在している」ことを前提にしなければならない。

2.2 二つの確認

2.1で述べたように「確認」とは、「不確かなことが存在していて、それを誰かに確かめてから認める」と定義するのであるが、「誰か」が話し手自身の場合と他者である聞き手の場合の両方が存在する。ここでとりあえず前者を「自己確認」、後者を「他者確認」と呼ぶことにする。

7）（教室を探し回ってやっと見つかったときに）

a　教室在这儿啊。（教室はここにあったのか。）

*b　教室在这儿吧。

7）aのような文は、「教室がどこにあるのかわからなかった」が、自分で探しまわった結果見つかって、「教室はここにある」という情報が確定情報になったことを示している。このような「確認」は聞き手の存在とは関係のない「自己確認」であり、“啊”は話し手が「自己確認」によって、発話時点までに認識、把握していなかった情報を発話時点において認識、把握できたことを示す、即ち新情報の獲得を示すマーカーであると言えるだろう。しかし、“吧”は7）bに示すように話し手の「自己確認」の場面には用いられにくく、常に聞き手の存在を必要とするものである。なお、本稿では、諾否疑問文につく“啊”と“吧”を考察するものであるため、平叙文の文末について「自己確認」を表す“啊”については触れないことにする。

ところが、聞き手の所有している情報に関しては、話し手自身による確認は難しく、聞き手に依存するしかないのである。この場合、確認は以下の例に示すように疑問文の形で問いかけ行為として実現される。

8）许：写的什么呀[5]？（台本はどんな内容？）
　　周：赵一曼。（趙一曼を描いたものよ。）
　　许：让你去演赵一曼呀?你行吗?
　　（趙一曼を演じろと言われたの？大丈夫？）　　（『愛』）

9）杜：就为这个呀?那你何必找我?
　　（このためだったの？じゃ何で私を選んだの？）　　（『過』）

10）贾：你们还没吃午饭吧?（お昼はまだでしょう？）
　　杜：一点都不饿。（おなか空いてないわ。）　　（『過』）

11）丁：你们下午没事吧?（午後何もないんだろう？）　　（『頑』）

つまり、諾否疑問文に用いられる“啊”と“吧”は、「聞き手によって話し手の不確かな情報を確かな情報にする」という「確認」を表す語気助詞であると理解して差し支えないのである。

さて、上述のものが確認要求表現と理解してよいものであるとすれば、諾否疑問文の文末に用いられる“吧”は場合によっては異なる性質も見せている。

例えば、

12）于晶:我这么穿也挺好看的吧?（この格好もけっこういけてるでしょう？）

*我这么穿也挺好看的呀?

石岜：小县城的感觉。（田舎っぽいよ。）　（『頑』）

のように、まず当該情報―「この格好もけっこういけている」は明らかに聞き手所有の情報ではない。そして当該情報は話し手にとって不確かな情報とも言えない。むしろ、聞き手が話し手と同じ認識をもつよう促すものであると考えられる。この場合“啊”を用いることはできない。

2.3“啊”と“吧”の意味と機能

これまで“啊”と“吧”による確認について述べてきた。それを簡単にまとめると以下のとおりである。

聞き手不要型―“啊”（話し手の自己確認　平叙文の文末につくため本論では扱わない　例文7））

聞き手依存型――“啊”、“吧”（他者確認　例文8）～11））

聞き手認識誘導型――“吧”（聞き手の同意を求める　例文12））

3.“啊”と“吧”による確認表現

2では、諾否疑問文に用いられる“啊”と“吧”を「聞き手依存型」と「聞き手認識誘導型」に分類した。この部分では、主に「聞き手依存型」の“啊”と“吧”について検討したい。

3.1 情報提供を促す働きをする“吧”とそういう働きをしない“啊”

“吧”を用いた確認文は情報提供要求文として働く。

13）你妈妈叫王桂珍吧?（お母さんは王桂珍と言うんだろう？）（『老』）

14）范：怎么样?高兴吧?（どう？うれしいだろう？）

周：就那么回事。（別に。）　（『愛』）

13)、14）のように、話し手にとっての不確定情報――「お母さんの名前は

王桂珍であるかどうか」「聞き手がうれしいかどうか」は聞き手のみが所持し、確定できる情報であるため、直接聞き手に問いかけて不確定を確定にするしかないことを意味する。この場合、聞き手は話し手に情報を提供するよう求められている。

しかし、同じ聞き手依存型の“啊”はやや異質な性格を見せている。例えば13)、14）の“吧”を“啊”に置き換えると、

13)'你妈妈叫王桂珍啊?

（お母さんは王桂珍という名前だったのか。王桂珍ではないと思っていたのに）

14)'范：怎么样?高兴啊?

（どう？うれしいのか？うれしく思うはずがないのに）

になるが、これは話し手が初めから聞き手によって不確定情報を確かなものにしようとするものとは考えにくい。むしろ、発話時点において「お母さんの名前は王桂珍である」、「聞き手はうれしく思っている」という情報を話し手が一旦獲得するが、その情報は話し手の所持している情報（例文13)'、14)'の網掛けの部分）と矛盾しているため、納得できずもう一度聞き手に確認する文であると考えられる。13)'、14)'はともに聞き手によって情報を提供された(14)'は話し手が聞き手の表情を見て察知した場合もあるが、それもある意味で聞き手が話し手に情報を提供していると筆者は考えている）ので、この場合話し手は必ずしも聞き手の応答を要求しているわけではない。つまり、“啊”を用いるとき、話し手は最初から不確定情報があってそれを確かなものにしようと聞き手に確認するものではない。それより聞き手によって提供された情報が話し手の既存の情報及び知識と抵触するときに用いられる。この場合、聞き手によって提供された情報に対する話し手の強い不信、つまり、そうであるはずがないという話し手の心理がうかがえる。趙元任（1968）が指摘した“用于求证式问话”はまさにこれを裏付けている。以上述べた内容は次のように図解することができる。

図1

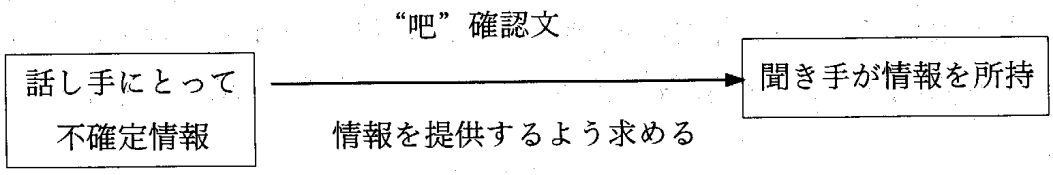

図2

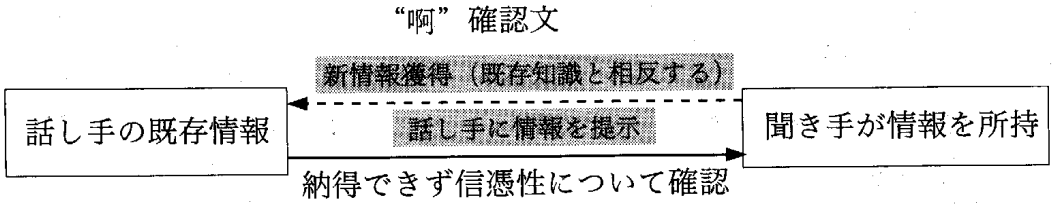

図1と図2からもわかるように、同じ「聞き手情報依存型確認」といっても、情報の方向は逆である。“吧”は話し手の情報、認識が確かな場合には使いにくい。そして、確認すべき情報は聞き手にとって確定情報である（あるいは確定情報であると話し手が想定した）場合に用いられる。しかし“啊”の場合、確認すべき情報は話し手が発話時点において、聞き手によって獲得し、その情報がまた話し手の既存情報と矛盾が生じるものでなければならない。この事実は、発話時までに話し手が不確定情報を所持しているか、それとも発話時点に話し手が獲得した情報が既存情報（話し手の中では確定された情報である）と相反するものなのかによって“啊”と“吧”が区別して使用されていることを示唆している。

3.2 “啊”、“吧”と副詞の共起

「確認」の“吧”は“一定”“肯定”などのような蓋然性の高い副詞と、また“好像”“也许”などのような蓋然性のやや低い副詞[6]のいずれとも共起できる。

まず、蓋然性の高い副詞との共起を見てみよう。

15）老师，文化大革命您肯定吃了不少苦吧?

（先生、文化大革命の時、きっとひどくやられたんでしょうね。）（『北』）

*老师，文化大革命您肯定吃了不少苦啊?

16）（陈主任对孙小姐）

你们老板一定很器重你吧?

（ボスからきっと重く見られているんでしょうね。）　（『編』）

*你们老板一定很器重你呀?

15）、16）のように、話し手は推論によって「先生はひどくやられた」、「ボスから重くみられている」という命題を導きだし、ある程度の確信度をもっていながらも、聞き手が情報を所持している（つまり聞き手にとって確定情報である）ため、聞き手に直接提示して確認をとらなければならない。つまり、話し手の推論によって導き出された命題は話し手にとって確定されていない聞き手所有情報だからである。

次に蓋然性の低い副詞との共起を見てみると、

17）这也许是两种制度的两个基调吧?

（これはたぶん違った制度の違った基調といったものでしょう。）

*这也许是两种制度的两个基调啊?

18）撕了好像不太好吧?

（破ったらたぶんまずいでしょう。）　（『北』）

*撕了好像不太好啊?

のように、蓋然性の低い副詞は、話し手が自身の主観的判断についての確信が低いため、推論内容が不成立の可能性が高い。したがって情報を提供できると思われる聞き手に確認をとるのである。

しかし、15）から18）の“吧”を“啊”に置き換えると非文になる。つまり、“啊”は蓋然性の高い副詞とも蓋然性の低い副詞とも共起できないのである。前にも述べたように、“啊”を用いた確認文は、話し手が発話時点においてすでに聞き手によって確定された情報を獲得していることを前提にしている。ゆえに、確認すべき情報に対する話し手の推論という過程は存在し得ない。“啊”は蓋然性の高い副詞と蓋然性の低い副詞のどちらとも共起できないのである。

3.3「意向の確認」の“啊”と“吧”

“啊”と“吧”は、聞き手の意向についての確認にも用いることができる。次の例文を見てみよう。

19）a 我给您拿杯冷水啊?

b 我给您拿杯冷水吧?

（お冷やをもってまいりましょうか。）

この二つの文はいずれも話し手がある意志の遂行――「お冷やをもってくる」を、その意志の遂行と関係のある聞き手側がそれを受け入れる意向があるか否かを問いかけるものである。朱德熙（1982）はこのような“啊”を「相手の意向についての確認」であると、邵敬敏（1995）はこのような“吧”を「疑問文の形で提案を表す」とそれぞれ指摘している。しかし筆者からすれば、後者の「提案」も疑問の形をとった以上は聞き手の承諾を要求することを意味し、そういった意味では朱が指摘した「相手の意向についての確認を表す“啊”」と同じ扱いをすべきではないかと考える。

ところが“啊”も“吧”も「意向の確認」に用いることができるとなると、次に出てくる問題は両者の違いである。“啊”を用いた19）のa文は、話し手の中で「お冷やをもってきたい」という意志がすでに確定され、それを受諾するか否かは聞き手が決めることであるというニュアンスがかなり強い。そしてこの場合の“啊”は前で考察した確認の場合と違って上昇音調をとる。ところが“吧”を用いた19）のb文は、話し手の中で意志が確定されていることは“啊”と違わないが、提示の仕方においては“啊”より積極的であり、聞き手に受諾してほしいというニュアンスが強い。邵が「提案を表す」と指摘したのもこの理由によるのではないかと思われる。

4.「聞き手認識誘導型」の“吧”

諾否疑問文につく“吧”は「聞き手依存型」の確認だけではなく、聞き手が自分と同じ認識をもつよう誘導する機能ももっている。次の例文を見てみよう。

20）小刘麻子：我不说假话吧?（俺、うそ言ってないだろう？）（『老』）

21）方：我没得罪你吧?

（俺、お前の気に障るようなことしてないだろう？）　　（『過』）

20）と21）は、話し手に不確定情報があってそれを聞き手に依存して確実化するものではなく、話し手の中ですでに確立された認識――「俺はうそをついていない」「俺はお前の気に障るようなことはしていない」に対して聞き手も同じ認識をもつよう、聞き手の同意を求めるといったものである。この場合、話し手の期待している聞き手の答えは「はい」である。そして、この聞き手認識誘導は度が過ぎると「強要」につながりやすい。

5. 終わりに

本稿では、諾否疑問文につく“啊”と“吧”を「確認」という意味と機能に注目しながら、その使用場面における違いについて考察した。そして“啊”と“吧”がその使用において、聞き手に依存するか、しないか、また聞き手に依存する場合、発話時までに話し手が不確定情報を所持しているか、それとも発話時点において話し手が既存情報と矛盾する新情報を獲得したかによって区別されることが明らかになった。この部分では考察した結果を以下の如く示すことにする。

〈聞き手依存型〉

A「聞き手の情報に依存する」

“啊”――①話し手は発話時点において聞き手から確定された情報を獲得しているが、既存情報と矛盾が生じる

②信憑性についての再確認

“吧”――①話し手は発話時までに不確定情報を所持している

②聞き手情報についての確認

B「聞き手の意向についての確認」

“啊”――①話し手は発話時点において確定された意志を所持している

②受諾するか、しないかは聞き手が決める

“吧”——①話し手が発話時点において確定された意志を所持している点では“啊”と同じである

②“吧”を用いた文は“啊”が使われる場合より聞き手の同意を求めるニュアンスがやや強い

〈聞き手認識誘導型〉

“吧”——①話し手は発話時点において確定された情報を所持している

②聞き手が話し手と同じ認識をもつよう誘導する

注

1) “啊”は発音の際に、その前の連なる音節の末尾音によって“啊、阿、呀、哇、哪”に音変化を起こす。例文9)、12)、16）の“呀”もこれにあたる。

2) 呂叔湘 1990 《呂叔湘文集第一巻（中国文法要略)》298頁

3) 朱徳熙 1982 《语法讲义》288頁

4) 木村・森山 1992 《日本語と中国語の対照研究論文集（下)》4頁

5) この“呀”は疑問詞疑問文の文末につくため、本稿の考察対象ではない。

6) 蓋然性の高い副詞と蓋然性の低い副詞の分類については玄 1993 参照

〈参考文献〉

胡明扬（1981）〈北京话的语气助词和叹词〉《中国语文》

呂叔湘（1990）《呂叔湘文集第一巻（中国文法要略)》商务印书馆

邵敬敏（1996）《现代汉语疑问句研究》华东师范大学出版社

王力（1985）《王力文集第二巻（中国现代语法)》山东教育出版社

赵元任（1968）著、丁邦新译（1980）《中国话的文法》香港中文大学出版社

朱德熙（1982）《语法讲义》商务印书馆

神尾昭雄・高見健一（1998）『談話と情報構造（日英語比較選書②）　研究社出版

木村英樹・森山卓郎（1992）「聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して—」『日本語と中国語の対照研究論文集（下)』　くろしお出版

玄宜青（1993）「広義蓋然性を表す副詞の体系」『中国語学』No. 240

杉村博文・木村英樹訳（1995）『文法講義』（原著　朱德熙 《语法讲义》1982）白帝社

ﾀﾞｲｱﾝ・ﾌﾞﾚｲｸﾓｱ著　武内道子・山崎英一訳（1994）『ひとは発話をどう理解するか』　ひ

つじ書房
藤堂明保・相原茂（1985）　『新訂　中国語概論』　大修館書店
中右実編　赤塚紀子・坪本篤郎著（1998）『モダリティと発話行為』　研究社出版

〈例文出典〉

『愛』《爱你没商量》　王朔影视剧作选　中国社会科学出版社 1993
『頑』《顽主》　王朔影视剧作选　中国社会科学出版社 1993
『編』《编辑部的故事》　王朔影视剧作选　中国社会科学出版社 1993
『過』《过把瘾就死》　王朔影视剧作选　中国社会科学出版社 1993
『北』《北京人——百个普通人的自述》张辛欣・桑晔　上海文艺出版社 1986
『老』《老舍剧作选》　人民文学出版社　1959

付記：本稿は日本中国語学会関東部例会（2000/7/15　於お茶の水女子大学）における口頭発表の原稿をもとに加筆、修正したものである。懇切なるご助言をくださった相原茂先生、筑波大学の劉勲寧先生、そして石田知子先生に心より感謝の意を表したい。